



TITLE:

進歩か退歩か(二)

AUTHOR(S):

財部, 静治

---

CITATION:

財部, 静治. 進歩か退歩か(二). 經濟論叢 1921, 13(5): 673-687

ISSUE DATE:

1921-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127841>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十卷 第五號

大正十年十一月一日發行

## 論叢

租税に於ける補完作用に就て

法學博士 神戸正雄

植民政策是非

文學博士 原勝郎

利潤の經濟的及び道德的性質

法學博士 田島錦治

進歩か退歩か

法學博士 財部靜治

農業勞働問題

法學博士 河田嗣郎

## 時論

地方税制度の整理を論ず

法學博士 小川郷太郎

## 說苑

大邱の令市に就いて

經濟學士 黒正巖

## 雜錄

滿洲に於ける支那商店の帳簿

法學士 大森研造

社會主義の分類

經濟學士 小林輝次

獨逸大都市に於ける離婚數の激増

法學士 汐見三郎

# 進歩か退歩か(二)

財部 靜治

## 五

前にも一言せる如く、社會に進歩ありとは屢々主張せられ、進歩てふ語は極めて廣く使用されその進歩を代表すと推測せらるゝことは、極めて熱烈なる語句を以て、尊信せらるゝにより、進歩は萬民により、希望さるゝとの推斷に出つることを、餘儀なからしむるものゝ如し、されどかく斷するか如く、眞理に遠かれるものは世上になし、蓋しその進歩は社會組織の變革、社會秩序の根本變化を必要ならしむへきも、この種の變遷を完うして、世の整頓に復する迄には、二理由に基つき反對を估ふべく、運命つけらるればなり、即ち第一に人々は通常習慣の動物にして本來保守的なり、然るに社會の再整理は、行動反覆の習慣的仕方の破毀、之に關する新仕方の樹立を意味するを以て、人々は各改新に對し、憤ることゝなるべく期待せらる、第二に各社會秩序はその組織の一部として、一の優越階級を含む、而して進歩とせらるゝものには、實際上不公平なる特權優遇の撤廢を含む故に、社會に有力なる右の分子により、恐怖せられ嫌忌せらるゝことゝなるの外なし、進歩か一特權を打破すべきことを、意味する程度に於ては、進歩はその優越階級を

強ふることによりてのみ、達せられ得へし、又進歩は慣習の擾亂を意味するを以て、民衆の群に對しては、之か實現可能なるに先立ち、民衆の利益のため之を要求することを、民衆に納得せしむるの要あり。

右説く所によりて考ふるに、所謂進歩には大なる障礙あるを知る可し、而も亦その障礙如何に大なりとするも、その一事を以て進歩の能不能を斷せしむるを得ず、然るに進歩の能不能の問題につきては、前にも一言せる如く、史家の間に人間開化の、永遠前進を拒む者あると同様、鋭敏なる數思索家は、進歩の不可能を論證せんと試みたり、就中佛國ソルボンの教授たりし *Emile Faber* は、進歩には連續改良の觀念を含むを以て、進歩は決して達成せらるゝことなしと信したり、實に人間としての各個人は始めに於けるより、より大なる知識、幸福及徳性を、有するに至れること、人間が一前進をなせりとせばそれは連續的前進たりしことは、共に立證し得ざるにより、彼か進歩視せるものあることは、少しも論證せらるゝを得ず、科學的知識増せることを、立證するは可能なり、されどかゝる知識は、必ずしも幸福及徳性を増せることなし、特定種類の改良あるを信し、又之を達成するは出來得へきことなるも、一般進歩あることを、論證するは不可能なり、要するに彼の評論によるに、吾人は社會の究極目的を知る能はず、而してかゝる知識なくんば、社會の永續的方針を窮ふべき、何等の方便を有せざるを以て、一般進歩は達成せ

らるゝを得すとす。

次に進歩不可能を説きし、他の一論者としての故社會學者 Ludwig Gumplowicz は、特殊の系統論を吐露したり、その所説によるに人間不幸の増進は、發展の避け難き結果なり、そは社會的過程に固有なり、蓋し社會進化は、人々の間に於ける欲望の滋殖を含む、而してその連續的分化及滋殖の勢か、遮きられ得へきことは、あり得へくもあらず、されど優越なる少數者は、その一切の欲望を現實たらしむへき、諸方便を左右すへきに反し、人口中の大多數者は、かゝる満足を達成するの、相應能力を延はさしめ得ざりしを以てなり。過去の發展上一面には鋭き願望の、數を増せるに拘はらず、實にその能力は割合に不動を續けたり、吾人か未來に於ける社會事情につき、一判斷を立てんとし、是迄に實現されたる、進化の歷程に基づき、その判斷を立定せんとする際、右の事情に變化を生せんと、希望するの根據全くなし、實に吾人は満足方便の統制か、諸治者階級により、鞏固に把持せらるゝにより、その統制か弛めらるゝに至らんことは、道理上期待の外にあるを見る、その一結果として、普通民衆の未來に於ける運命は連續的に益々非運を進むと、描かざるを得ず、蓋し不幸の増進は、充たされ得ざる欲望か、益々増すとの理由に基づく、當然の歸結たるへきを以てなりとせり。

## 六

前記二つの進歩不可能論中、Gumpłowicz の所説に對しては、寧ろ民衆衆庶の連命か、改善を遂げたりとするの信條を以て、人間發展の歷程に關する、賢明なる一解釋とすへきことを、答ふるを得へし、試みに食人俗、奴隸制、農奴制、自由勞働、財産權及民事上政治上の諸權利と言ふか如き、社會發展の逐次階段により、何か言明含意さるゝかを注目せよ、右に列舉せる諸語は、社會親善的發展の逐次階段に於ける、民衆衆庶の狀態を代表す、而してその系列は、人身的自由の享受及財産權に於て、徐々なから著大にして、又一貫せる前進と、生命の一層大なる満足を、生めることを意味す、人々の大多數は現今尙、充たし得ざる幾多欲望を有するも、一面僅かなる少數者を除けば、割合に必要な欲望以外、多くの欲求を充たしつゝあり、而して人口中著しき部分は、事實上面前に潤澤を眺めつゝ、缺乏に迫るに拘はらず、夫等の民衆中その境遇を、前時代に於ける奴隸及農奴の境遇に、悦びて復せしめんとする者、あるへきや疑はし、自由勞働の名ありて、實際隸屬の狀況にあるの、事例は尠からずとしても尙然り、加之奴隸及農奴は、その境遇改善の樂觀主義を、懷ふへき根據を全く缺きしも、今日の尋常人は、その運命の改善に努め得へしとの希望を懷くの根據を有するを以て、右の疑を發せしむることは一層正しとせん、素より唯物史觀を奉する者、或は此論旨に反對すへしと雖も、一旦貧苦に陥ぬらは、子々孫々浮ふ瀬なからんと、説き立つる經濟的定道論は、正しとすへからざるに似たり、その理由の一端は、曾て公け

にせるものの中にも、説きしことあれど、(拙著經濟眼四〇頁參照) その詳説は茲に試むべき限りに非ず。若し夫れ Faguet の論旨に至りては、一見奇矯に似たりと雖も、退いて考ふれば、味ふべきもの多きに似たり、これ吾人か以下進歩概念を析理し、徐ろに評論を進めんと欲する所以なり、尤も之か評論に先たち、社會の目的又は理想何たるか、社會の進歩何たるかに就き、從來諸學者の試みたる諸説を、紹介又論評するは有益なり、否吾人は本編の稿を起せる當時、之に當るべき目論見を有せるも、爾來種々の私事に妨げられ、その續稿を急ぐ能はずして今日に至れり、吾人は今初志を捨てたるに非ずと雖も、時徒らに過ぎて、氣遅れの感なきに非るを以て、便宜上之を別稿に譲ることとし、本編にありては結論を急ぐこととすへし。之と同時に吾人は、以下の論旨か Robert Michels, Probleme der Sozialphilosophie, 14 中の所説に、その骨子を借れるものなることを明記して、後日脩補の便を計らんと欲す。

## 七

進歩てふ眞觀念、換言すれば大仕掛による組織的改良の概念は、その起源近代にあり、少くとも近代に普及せるは、殆ねく知られたり、過去に普通なりし見解は、實際諸事情か、その一般性質上不變なりとするにありき、素より希臘人は變遷の大勢 (General flux) に關する、哲學的概念を有せるも、一進歩概念と呼ぶの價值ある程、その觀念を明晰に、社會に應用せることを知らず、

現今と雖も一大事件とすへき社會現象は、大部分は始めより毫も企圖されず、種々にして又部分的なる企畫に本づく豫見されざる結果なり、社會的行動の一大案か、賢明に立案せられ、又遂行せらるゝは稀なり、各利害は摺み合ひつ戦ひつ搜索しつゝ、幾分か盲目的又利己的なる仕方にて、共にその作用を及ぼすへし、諸普通目的に關しては、精力の大部分は浪費せらるゝ、その間一種の前進は起ることあるも、そは軍隊の井然たる行進の如くならずして、さながら群衆の澎起の如く然り、假令は今日の米國民はその經濟的、政治的、宗教的發展上、明晰又合理的なる一案により、案内せらるゝことを、誰ありてか籍口し得へき、同國民は瞥見及衝動を有すへきも、一の意志は卑近又急切の利害關係ある、數事功につきての外之を懷かす。<sup>\*</sup>

夫れ進歩概念は、相違せるも缺くへからざる二元素を含意す、その一は研究すへき物體の、二つ又はその以上の發展階段間に於ける、一比較より成れる思索の一働きなり、その二は經驗的なれる一規矩として、その比較を遂行するの道具たるへきものなり、その規矩はその比較を遂ぐる人に固有のものとして、一部は傳習より得られ、一部はその生涯の經驗として、得られたる信念複合たり、その人の「世界觀」なり。

從ひて比較に本つきて歸結せられ、進歩退歩又は停滯をその論旨としつゝ、下さるへき判斷は一の價值判斷を含む、されど進歩概念にありては、比較せらるゝ發展期間の最終期を、時間上之

\* Cf. Cooley, Social Organization. pp. 399, 400.



に先たてる時期より、値打ありと考ふることを要す、蓋し辭源論的に窺知し得べきか如く（英語の progress 獨逸語の Fortschritt も前に進むなり）進歩は改善、Besserung の謂なればなり、そは圖形的に遞昇線として、記載され得へし。

學者或は世の變遷上、進歩あると共に退歩あることを認め、又社會が漸進しつゝあるや否やを最後に決定し得るためには、之に先たち社會の目的を決するの要あり、又進歩退歩が測定さるべき標準も決定さるゝの要あるを認めつゝ、客觀的に之を定め得べきことを、默認するか如き者歟からず、假令は一學者は説いて曰く、夫れ藝術、文學、道德行爲及政治的慣例の、正しき尺度何たるか、素より吾人の理想にして恒同不變たりとせば、實在とその理想との一比較により、進歩を決定するは、容易なる一事項たるへきも、是等の理想は絶えず動きつゝあるか故に、畢竟社會的行動の「諸結果」を吟味し、時過きて後社會は、人を保護し、暢達せしむる能力上、勝れることゝなれるや劣るに至りしやを、察することとするの外なしと、<sup>\*</sup>その所説上萬人の能力を、出来る丈け大に暢達せしむるを以て、社會の目的視するは明かなり、素よりかく萬人能力の最大暢達を以て、進歩の極致視し、文明進歩の目標視するを以て、客觀的に立定せらるゝと考ふる人は尠きに非ず、現に經濟學の大家 Brentano の如く、一九一二年乃至一三年の冬學期中、講せし經濟通論の最後に經濟發達の目的とする所は、畢竟文明發達の目的とする所に歸す、然るに文明發達の

\* Cf. Blackmar and Gillin, Sociology. p. 414.

目的として、客觀的に立定せらるるものは、右に説く所の如しとし、之を諸先哲の所説一致する所に徴するも、歴史的發達の歸趣に稽ふるも、然りとすべきことを掲げて、その客觀的なことを斷せんとせり、然れども吾人は依然として疑問あり、史實を讀みて右の如しとし、又先哲通有の所見茲に在りと、斷する間に主觀的判斷を挿めるの跡、全くなしとするを得へしか、その進歩の目的とする所、畢竟一の假説に非ずやとするは之なり。

兎に角進歩の概念的要素につき、前陳の如き序論的論定を下さんか、進歩概念そのものか、曖昧たるを知るべく、之を使用するには、大に慎むの外なきや明かなり、進歩は一の相對的、概念なり、判斷すべき人により左右さるべく、從ひて主觀的なり、社會生活上周知の諸形式として、萬人の口に上るもの、假令は革命、進化、反動、信仰自由、拘束、貴族制、民主制等は、各個人の信念復合如何により、進歩の途上にありと評價せられ、或は退歩の途上にありとせらるべき所なり、一殺人者朝日某、世上に兎角の評ありし一富豪を殺害し、自から亦之に殉せるを以て、今日普通の人は有徳の所爲と判斷することなかるへしと雖も、一部の人は之を以て、世の肅清進歩に就くの、一曉汽笛視すべきを見て、卑近に之を察すべきなり。

## 八

一の具體的生現、又は一の具體的發展か、人間のために一進歩又は一退歩を意味するかの判斷

上、意見の相違を生ずる所以のもの、一は諸状態の各變化か、人間の一部を利するも、他の一部を害するの事實により、釋明すべき所なり、一の大別階級全部、少くとも一の細別階級を害し、又は全く排斥せざることをなき、進歩あることなし、こは印刷術の發明、拷問の廢止につきても、謂ひ得べき所なり、進歩は決して全員のために、かゝるものたることなし、印度の諺に謂へり、一人の家焼けなは、他人は之により暖氣をとると、進歩も亦斯くの如し、その途は屍を以て鋪石せらる、輓近の文明及人の心理は、極めて複雑なる抽象なり、從ひて進歩概念も同様に、必然複雜性の刻印を印せらるゝの外なし、進歩はその性質上、種々様々なる元素より組成せられ、又種々の影響を伴ふ、從ひて實際上一範圍に於ける進歩は、他の範圍に於ける不利退歩の結果を、伴はざることなきを得ず、一方向に於ける殆んど何れの進歩も、他の方向に於ける退歩、少くとも一沈滯を條件とす、自然そのものもその軌範に則る、實に進歩には個性に於けると同様、一の制限的法則之を支配するに似たり、天才詳言すれば、その同胞の平均以上に、遙かに傑出せる非凡の特性は、謂はゞ人間の智能的進歩の、一權化を代表せり、されは學者か天才を以て、人間の案内者と呼へるも不當にあらず、されど一人に天才的能力の備はることは、その人に同様に著しき瑕瑾及缺點共存せることを條件とす、否學者によりては自然論理的に、この共存あることを附言せんと、試むるに至れり、一の過あるは一の不及あることを斷せしむ、甲あることは乙なくして

目撃し得へきに非ず、Lombroso は天才か一種の神經的畸人たり、一種の神經過敏者たり、精神病者の一近親たりとの、主張を力説したり、氏は實にその主張を天才即氣狂 (Genio e Pazzia) の一標語と迄なせり、而してその門下の獨人中最良なる者は、凡て研究物體を完全に究め、之を精研せる天稟上、深刻を盡せるは、偏面的能力を伴へること、略言すれば深遠なる天稟か、多くは偏面的たることを、確定せる事柄と想ひたり (Hans Kurella, Die Intellektuellen und die Gesellschaft. Beitrag zur Naturgeschichte begabter Familien. 1912) 吾人は無條件に Lombroso の學説に、賛成することなしとするも、尙右の論斷によれば、一般に進歩問題に關し、一の有用なる根據を、授けらるゝに似たり、天才者の心理上、病的に發育し過ぎたる部分と、病的に遅れたる部分、詳言すれば中に於ける相當能力の、標準に劣れる部分と、併立又混淆の關係により共存す、略言すれば、大能力と大缺點とは共存す、偉人の諸弱點は、屢々滑稽なる程度に及び、その原因を解せざる群衆によりても、亦勞せずして知覺され得へき所なるか、そはその人を傑出せしめ、又その周圍の人以上卓越せしむへき、その大特質の相關に外ならず、大文學者大詩人は、多くは極めて劣等なる計算者たり、傑出せる算數家につきても、亦同様なることあり、大藝術家として、高雅なるものゝ觀想上及びなき者は、論理的思惟につきては殆んど常に、子供らしき愚劣、類ひ稀なる無能力を示し、又精神科學に悖り、處世の活用術につきても亦多くは、力一杯の土臺に立てり、彼等か

官能及本能を、最も巧みに美化することにより、人間の進歩を表明するよりも、一層良好に之を表明し得る者全くなし、されど彼等が體現せる進歩は偏面的なり、その進歩には一缺點を伴へりその卓越の裏は、その劣弱の表と、不可分なればなり、而して鹽島仁吉氏明治二十五年の著書「泰西經濟學者列傳」中、アリストートルを傳し、就中「彼は非常の修飾家にして、其衣服及び外貌に注意すること、宛然たる小女子の如くなりしと云へり」如何なる英雄豪傑と雖も、或る點より之を觀察すれば、往々此笑ふ可きの事多し」と謂へるは、恰も右の如き理想か、珍しからざることを示すの、一證として附説し得へき所なり。尤も人の個性上、甲特質の卓越は乙特質の貧弱を伴ふへしとするも、その相關は必然たり、從ひて如何にその弱點を補はんと努むるも、全くその效果なかるへしと、謂ふへき程度迄その關係を重んずべきや問題なり、此點は社會進歩の場合にありては、恰も考量を要すへき所なり、即ち一進歩には犠牲を伴ひ、他の退歩を伴ふへしとするも公共意志か個人意志同様、危險的浪費的たる諸事情よりも、合理的たり節約的なる諸事情への適應を遂げんとするの目的を、有する結果として、右の犠牲は好し全部は、除かれ兼ねへしとするも、大に輕減せらるゝの要ありとすべきことなり、假令は商業にありては、輒近取引の規模宏大となれるに拘はらず、既に恐慌の唐突性破壊性を跡からしめ得たり、此種の災難か豫見せられ、輕視せられ、又諸種の保險により豫備せらるゝかために、輕微の損害を與ふるに過ぎざるか如き

時機は遠からずして來らん、貧困及貧困より惹起さるべき頽廢の大問題も、同じ仕方にて達識なる慈善及教育により、應酬され又大部分は打勝たれ得へし、宗教界にありても、現代に於て信仰の根底を、無殘に覆へし、かくて幾多の人を惱ましたるか如きことを、再び繰返すの必要は明かになからん、國家にありては民主制組織さるゝと共に、凶暴なる革命は、その跡を絶たんと豫想さる、而して萬國關係にありては、戰爭の急減少を見すんは、怪しむべきものあらん、凡て是等の事項その他多くのことにつき、社會的犠牲は豫見され得へく、啓發されたる公共意志を、表白すへき合理的方策により、豫備され得るに至らん。

## 九

前世紀の初め伊太利の一學者 Giuseppe Pecchio は、科學的文學的生産か、貨物生産の一般法則に従ふこと、商工業の發達は、常に教化の普及、書籍の著作及販賣増加を、伴ふことに關する一論文を草せるも、同時に經濟進歩と開化進歩との間に於ける、かゝる關係系統中、天才の發現及輩出をも、數へ得ること能はず、寧ろ恰も政治的沈衰及政治的虐政、並に經濟的恐慌の時代に、大詩人大作家を出せるは、何故なるかを論證する能はずと言明せり、(Dissertazione sino a qual punto le produzioni scientifiche e letterarie seguano le Leggi economiche della produzione in generale. 52. Ausg. der Biblioteca dei Comuni Italiani.) 即ち經濟的股賑に際し、著書はその數及讀者を増すへきも、その平均價值は低下

\* Cf. Cooley, op. cit., pp. 418, 419.

す、史家 Ranke も亦哲學的論文の分量、及その形式には確かに進歩あるに拘はらず、アリスト  
ートル以來の哲學に、實質的進歩を窺はしむることは、之を是認することを拒みたり、(Über die  
Epochen der Neuere Geschichte, Vorträge, h. sg. als Anhang zur Weltgeschichte, 95.) 現今吾人は諸知識か、  
極めて迅速に普及することを目撃す、小學教育制の普及は、從來想像されざりしか如き高さにあ  
り、而して又殆んど間斷なき、進歩期を送りつゝあり、加之高等普通教育も亦之に伴へるあり、  
一切の國に於て讀み且つ書く能はざる者の數は、迅速に減しつゝあり、多くの國にありては、既  
に皆無に達したり、然るに現時の天才發現を、第十六七世紀に比較するに、一切の國に於て尠し  
現時に於ける精神的進歩の外延擴張には、未熟なる洗練の對立あり、伊太利に於て Dante 及 Petr-  
arca は D' Annunzio に代り、佛蘭西の Molière は Rostand に、獨逸の Goethe は Sudermann  
に、英の Shakespeare は Bernard Shaw に代れり、若き開化國民のみは、明かに天才の發現に富  
むこと、假令は露西亞の Tolstoj 諾威の Ibsen の如きものあるも、夫等の國にありにも、亦右偉  
人の死後、之に比肩せしむべき、後繼者を遣はさざりき。

## 10

時として進歩は、一退歩の反映に外ならず、人間か體質頹廢に向ふこと多きに從ひ、中人の體格  
か低下し、その視力聽力が弱めるゝに從ひ、禿頭及尙早の白髪を増すに從ひ、又佝僂病者普及し

軍醫により生命に重大の危険を及ぼすことなくして、軍隊生活の勞苦を、忍ふに堪へすと宣言せらるゝ、壯丁數を増すに従ひ、略言すれば原始的なから、自然的發育を遂げ、かくて強壯なるべき動物性より、人が遠かること甚しく、世界の諸國に於て、身體の力勢を失はしむること多きに従ひ、全般の死亡數は減したり、加之地方の分子が四周より、都市に蟻集するは、嚮都市民化[Urbanismus]てふ名稱の下に、解せらるゝ民文的一現象たり、ために最も遍ねき民衆をして、その渡世を新鮮明郎なる田舎の空氣より、厭ふべき工場室内の、塵多く傳染病に富める、空氣内に遷すの結果を、生むべき所なるに拘はらず、そは結局人の中壽延長の傾向を、一層助長したり、疾病特に職業病の數は増せるも、壽命も一樣に増したり、統計は殆んど千篇一律に、死亡數が大工業地區にありては、農業地區に於けるよりも、迅速に減せることを實證す、加之多數の地方民が田舎の醫師及病院の親切に驅られ、その重病體を都に運び、その結果その都市の死亡數を、膨大せしむるか如きことなかりせば、右の査定は一層情確とならん、されは現に伊太利の鋭敏なる一女學者Gina Lombroso Ferreroは「頽廢の利益」I Vantaggi della Degenerazione. '04てふ、題名を與へし一書を著はせるか、氏は同書中生物學的統計的資料の助けにより、人の生命を圍める、諸危険多きに従ひ、その抵抗能力及適應能力は、幾何比例により増すべく、健康に害ある職業種類有業者、及身體上最も頽廢すべき民衆は、最も長命に達すべきことの、立證を擧げんと試みたり



何れにしても人の一般生理的特質、明かに劣悪となれると共に、中壽により測られたる生物學的條件の、同様の鮮明なる進歩は之に伴へり、この事實たる素よりその一部は、經濟的生存條件の改善と、多くの點に於て大規模なる、輓近衛生的豫防策とに歸すへきも、他の一部は虞らくは又その敵を増せるかために、惹起されし人の免疫性そのものを、増せるの結果と考察するを得へし他の一女生物學者Oda Lerda Olbergも、亦同様に體質頹廢を一概に一時弊視せず、人間が恰かも比較的に高く發達せし、現開化に於けるか如く、力の大試験に曝らされしこと、未だ曾てなかりしとの單純事實を擧げ、體質頹廢に即せる開化誹謗者 Kulturschmäher を、非難せるは正當なり (Das Weib und der Intellektualismus, '02) 原始動物狀態にありては、人の死滅は原則たり、原人は神經質たらししも、殆んど常に殺害によりて死し、或は一疫病のために倒れたり。唯吾人自身としては、現代の體質頹廢を、既定の事實視して可なるやに就きては、疑を存する者なり、従ひて本項の論旨につきては、首肯し得ざる點なきに非すと雖も、今姑らく Michels の所説を、其の儘承受しおくこととせり。(未完)